

火星



平成18年11月号

七曜抄 (三)

山尾玉藻

大仏に近き水辺の柿サラダ

子子の水の上なる榎櫃の実

蒲の絮とぶを背にレポーター

曼珠沙華撒きちらしある猪の里

曼珠沙華に囲まれてゐる土踏まず

曼珠沙華匂ひ立つこと恠こらへをり

曼珠沙華墓の前にて折られあり

十六夜の湯に会ふツアーコンダクター

秋草を桶いっばいに禰宜の来る

にはとりの跳び出して来し大根畑

太白星

柳生千枝子

アマリリス提げて重たき花なりし
老いといふ事ただならず汗を拭く
手をつなぐ浴衣の稚児の指冷たし
羨しとも踊り浴衣の母娘連れ
大花火咲く一瞬の華で佳し
独り居の耳が花火を聞き止むる
花火連打巨大な花の重ね咲き

杉浦典子

花火師のこゑ乗せて舟戻りきし
花火殻水のほひとなりぬたり

ジャンボ機の本気で走り出し涼し
大粒の雨落ちてきし黍畑
初秋の深川めし屋覗きけり
新盆の櫂に羽音してをりぬ
母が来て飯に酔を打つ盆の月

浜口高子

炎昼の芯へざりがに釣り落す
離陸機のと蜻蛉の空となる
東京の日かげ四角く夏果つる
遠滝のところどころを昼のぎす
利酒のひと口首の骨鳴りぬ
登山靴揃へてありぬ地藏盆
ロマンスシートに杖寝かせあり星月夜

火星作品 山尾玉藻選

玉虫の骸まじれる花火屑 神戸 深澤 鱻
浜風に吹きかはりゐし踊の輪
花火舟入日の岸に繋がるる
ふんばれる四股はこの世に茄子の馬
鳥のきて水飲む秋の作り滝 八幡 吉田 島 江
鉄砲水に洗はれし墓洗ひけり
稲びかり学徳護符のめくれあり
打水のあとの天王山揺らぐ
跳びきたる猫によるめく花南瓜
リハビリの靴溜まりある花槐
初秋や机の上の嬰の靴 大和郡山 城 孝子
灯の外に筵足しあり地藏盆
人ごゑの闇連れてくる地藏盆

新涼の夫が指折りしてゐたる
 秋の昼孔雀にちよんと顔のある
 滑走路灼け誘導の腕二本
 北浜や祭のあとに船舫ふ
 夕立の音に奈良漬買ひにけり
 六道の風に朝顔萎みたる
 両の手のふさがり軽し盆の市
 雨戸引く音のしてゐる盆の川
 墓山に烟のあがる竹の春
 入院を明日に種採る日和かな
 たちまちに水濁りをり稲光
 みづうみに沖のありけり稲すめ
 配膳の音のしてゐる山の霧
 雷鳴やこの世の底ひ洗ひるて
 日のいろの残りてゐたる蓮の骨
 干網に風の残からまる秋祭
 から井戸はどしやぶりなりし榎櫃の実

八幡 大山 文子
 姫路 松 たかし
 穴栗 田中英子

選のあとに

山尾 玉藻

北浜や祭のあとの船舫ふ

大山 文字

「北浜」の固有名詞が的確、北浜は商都大阪の象徴である。天満の天神さんに最も近い街で、天神祭の大きなスポンサーでもある。この句「天神祭」と言う言葉が無いのも良い。祭の後の佇しき、寂しさが「船舫ふ」にしんと捉えられており、見事。

雨戸引く音のしてゐる盆の川

松 たかし

近年「雨戸」を開け閉めする家が少なくなつて来ている。もしかするとこの家も普段は空家で、先祖供養の為の盆帰省の家かも知れない。作者は「雨戸引く音」の、近頃では珍しい音に興味を持ったのであろう。繊細で微妙な景を掬い上げている。

お一人さまと云はれし卓の吾亦紅

野澤 あき

野澤あきさんと言う作家は日常の中のちよつとした詩を掬い上げてものにする人である。昼食をとる為に寄つた食堂であらう。「お天さま」と言う明るい声がむしろ佇しい。案内されて着いた卓に一輪の「吾亦紅」が生けてある。心配りの優しさが却つて寂しさを呼ぶ。

木の洞の大きくなりし秋の昼

助口 弘子

微妙な詩の有り処を心得ている人である。「木の洞」が大きくなつたり小さくなつたりする筈はなく、「大きくなりし」は作者が捉えた感覚である。秋の大気の澄みにより、木の洞がはつきり見えたのである。清澄感による「大きくなりし」なのである。

魚飛んで大揺れしたる施餓鬼舟

高松由利子

夕暮近く大川端を歩いていると、びつくりするほど大きな魚が跳ね上がるのに遭遇することがある。おそらく鯉なのであろう。「施餓鬼舟」が淵の激みにさしかかった時、掲句のような現象が起つたのである。この施餓鬼舟の揺れは人間界と霊界との狭間の揺れかも知れない。

集ひたる手相骨相盆の昼

永嶋みね子

親族が集うのは盆か正月。親子、はらから、うからやからだから、「手相骨相」は良くも悪くも似たようなもの、血縁と言う逃れ難き「手相骨相」なのである。

夕風やペダルに足をあそばせて

吉田 康子

「ペダルに足をあそばせて」に俳句的写生の骨法がある。夕暮の海を見ている倦怠がこの表現に集約されている。波ひとつ無い海は、一日を終えた作者にとつて安らぎでもある。

(以下略)

恒星圈

同人 I

吉田康子

夕月夜のぼりつめたる花きうり
釣竿のゆらしてゆきし青石榴
三伏のそれも真昼の朱雀門
干梅を壺にねかせし月夜かな
木下闇禰宜の祝詞に嬰ねむり

丸山照子

吉田島江

一力の高提灯や鉾祭
自転車が峠路をゆく夏休
盆の昼空中庭園乾きをり
降る前の山ちかづき来ちちる虫
大文字うしるの声を聞いてゐる

義仲寺のまつたき芭蕉大葉かな
気くばりの余生なりけり稲つるび
待たされし日傘に夫を入れにけり
鬱の日の藍でありけり秋茄子
桐一葉けふ善相の天王山

山本耀子

米澤光子

ジャスパール国立公園
氷河に立つ冷たき夫の手を借りて
氷原の端秋雲へつづきけり
秋水となりて氷河のほどけをり
燕去ぬ湖瑠璃色を深うせり
瀑音の中淋しさの増しにけり

流星や一筋の風こめかみに
星祭の星の散らかる幼稚園
ばかばかと口で走らす茄子の馬
とんぼうに飽きし子が振る神の鈴
陶狸の辺りでとんぼつんのめる

獅子座

山尾玉藻推薦

大城戸みさ子

背^ナの子に一本抜きしねこじやらし
陸橋を上りつめたる銀河かな
かなかなや白玉だんご浮いてきし
唐黍を焼いてをりたる屋形船

高橋芳子

深爪が金魚の数を数へけり
泣き虫の日焼子に爺耳うちす
背を返し犬と寝たふり無月かな
台風の兆しの雲の花火かな

竹下幸子

赤とんぼ溪に生れて虹映ゆる
かなかなの止んで瀬音の戻りけり
「黒い雨」本棚にあり鯛雲
落款のまだ濡れてゐる夕かなかな

渡邊美保

秋燕舟に積み込む藁の束
香水も置かれ西太后居室
夏館ピストル二丁展示さる
天安門人波の上の赤とんぼ

加藤廣子

優曇華を三日預かりをりにけり
落ちさうに覗ける鶴の子のうなじ
立話に立会うてゐる藪蚊かな
天の川丈伸ばしやる子の浴衣

河崎尚子

一人歌へば皆歌ひ継ぐ天の川
蜘蛛の糸一本遊ぶ野分晴
夜の秋のダンススタヂオ浮いてをり
秋立つや掌の貝温き汐たらす

西畑敦子

汗くさき青年覗く万華鏡
満開の吾亦紅よといはれれば
パンプキンスープ作りし敗戦忌
先生の家の実椿頑丈な